

ミキ先生との出会い

—初教九期生の一人として—

東 由水枝

私は、「学長 武田ミキ」で、最後の卒業証書を授与された平成元年度入学の初等教育学科九期生の一人である。私たちの卒業時には、ミキ先生は病床に臥され、現学長が代行しておられた。それだけに、九期生にとって卒業証書は「卒業した」というだけでなく、最後の「ミキ先生の卒業証書」ということで特別な感慨をもっていた人が多かった。

ミキ先生との最初の出会いは、平成元年四月八日の入学式であった。八十七歳という年齢にもかかわらず、真直ぐに姿勢を正し、毅然としたお姿での入学式辞であった。

二回目の出会いは、大学生生活も落ち着き始めた五月、「初等教育演習」での学長講話であった。この賑やかさ、騒々しさは前代未聞と多くの先生方から言われていた九期生だったので、事前にチューターの倉田先生から諸々の注意を受けた。

学長は開始時間より必ず早目にいらっしやること、制服をきちんと着用すること等々。

大学の講義にも慣れ、親しい友達もでき、グループ行動も多くなった時期で「騒々しい」という表現がぴったりの九期生、一人ひとり人が変わったのかと思うほど、この日は緊張していた。倉田先

生の薬が効きすぎているのかもしれないが……。学長講話予定の十分前には、私語一つなく全員姿勢を正し、ミキ先生がいらつしやるのを待っていた。

やがて、先生は、やや弱々しい足どりで入室された。最前列の真中に座っていた私は教卓に上られる時手を差しのべたい程であった。ところが、講話が始まって五分位たつ頃から荒いと思っていた息づかいもおさまり、次第に話に力がかもって来た。顔が紅潮し、今まで歩んでこられた人生をどうか解ってほしいという感じで語られた。講話の中で今鮮やかに蘇ってくるのは「初志貫徹」「努力には花が咲き実を結ぶ」ということである。

ご自分の生きて来た軌跡を語られる中に、「女性の育成」について多くの指針が含まれていたが、この二つが特に私の心の中に残っているのには訳がある。

私は社会人大学入試の第一期生である。四十七歳にして初等教育学科に入学したものの四年間本当に「初志貫徹」し、無事卒業できるであろうかという不安があった。三十歳の年齢差による心身のハンディを埋めるためには、並大抵の努力では追いつかないということは承知の上での入学であった。

高齡にもかかわらず、一時間半立ったまま力強い声で人生・信念を語り、私達へ生き方を示唆して下さった先生の「気力」に圧倒された。この気力こそが先生の「生きる姿勢」だと感動するとともに、四年間どんなことがあっても努力をし初志貫徹していこうと自らに誓った。社会人入学をした私を、世間は必ずしも温かい眼で迎えてはくれなかった。時には家族をも巻き込んで鋭くはね返す人もあった。が、ミキ先生の講義が常に私の支えとなつて、無事卒業できたのだと思つている。

そして：忘れもしない。ミキ先生との三回目の出会いである。

一年前期ドイツ語の試験終了後、不本意の答案を提出した私は、無念の思いでテキストを見ながら廊下を歩いていた。上目づかいに見ると正面に先生の姿があった。私はテキストから目を離さず（従って、先生のお顔をまともに見ず）黙礼をした。すれちがいがさま、大きな声が私の頭上をとんだ。「待ちなさい。なんですか。今の挨拶は。そんなことでは、社会に出てから通用しませんよ」と。

先生は常々、誠意と愛情のある挨拶の大切さを強調されていた。社会へ出て三十年、人の子の親でありながら、人間関係の基本的なところが抜けていたのである。この年齢になって、これほど明確に厳しく叱ってくれる人はいない。テストの出来の悪さなどはるかに遠くに飛んでしまった。私は深く頭を垂れ、ただただ「申しわけありません」と言うだけであった。

確かに先生が挨拶なさる時の眼差しは、厳しさの中にも、いつも見守るような温かさがあった。九期生の中には先生に出会えるのを楽しみにしている人も多くいた。出会った日には、注意を受けたにもかかわらず「今日、ミキちゃんに会ったんよ。うれしかった」と晴々とした顔で話してくれた友達もいた。

今、そのことを懐かしく思い出している。